<論　文>

アダム・スミスの「実質価格」について

揚　　武　雄

(一)

アダム・スミスは『諸国民の富』第一編，第5章の冒頭パラグラフにおいて，人々の富裕の程度は各自の所有する財貨が購買（purchase）もしくは支配（command）する労働の量に依存する，と言明した。そして，そこから一気に周知の結論をひき出した。

「それゆえ（therefore），商品の価値は……，その商品がその人に購買または支配させうる労働の量に等しい」。

「それゆえ（therefore），労働はいっさいの商品の交換価値の実質的尺度（real measure）なのである」（以上，引用は第一パラグラフ。以下，①というように略記する[1]）。

まずここで気の付くことは，富（riches あるいは wealth）の規定と価値もしくは交換価値（exchangeable value）のそれが同時に登場していることである。支配労働量による富の規定にたいするリカードウのスミス批判は後でみ

1）『諸国民の富』の第一篇（Book Ⅰ），第5章（chapter Ⅴ）は，E・キャナン編集のキャナン版（一巻本のいわゆる「The Modern Library」版）のページ数でみても，わずか17ページほどであり（p. 30～p. 46），本稿で使用した大内兵衛・松川七郎両氏による日本語訳（二巻本の岩波訳）をみても26頁（105頁～130頁）である。また，編者キャナンによって附された「欄外の摘要」（marginal summary）――本稿では〝見出し〟とした――はパラグラフ度になされており，それは全部で37ある（本論の中で引用したのは第22パラグラフまでである）。本稿では引用の便宜をはかるため，原書や日本語訳のページを記さず，引用がどのパラグラフにあたるかをアラビア数字（①，②……という風に）で記することにした。

ることにして，これから検討するのはスミスの後者の定義である。それにしても素朴な疑問を提出するとすれば，それは次のようなこと，すなわち富の定義からおこして，どうしてそれが商品価値のそれに連結しうるのか，ということである。

もちろん，上記引用に続く第二パラグラフにおいては，これまた有名な「toil and trouble」が「あらゆるものの実質価格（real price)」であり，労働こそが「first price」,「original purchase-power」であるとする（費用論的見地からの）いわゆる投下労働価値説も盛りだくさんに顔をのぞかせている（この見地はまた次の第6章の「職人たちが原料に付加する価値は，このばあい二つの部分に分解されるのであって……」なる記述にみられる，いわゆる価値分解説に引き継がれていく）のであるが，同パラグラフの最後は，やはり各人の所有する財の「価値は，それがそういう人々に購買または支配させうる労働の量に正確に等しい」と締めくくられているのである。また第三版で挿入された第三パラグラフは，ホッブスの『リヴァイアサン』を引用しながら，財をただ所有しているというだけではそれは力（power）とはならず，「市場にあるいっさいの労働またはいっさいの労働生産物にたいする支配」を行使すること，すなわち「購買力」として充用する際にのみ財は力を意味するということを力説しており，そこからこれまた「あらゆるものの交換価値は，それがその所有者にもたらすこの力の大きさにつねに正確に等しい」(③）と結論されているのである。

さて，各自の富裕の程度が「人間生活の必需品，便益品および娯楽品をどの程度享受できるか」(①）に依存している，とする命題は，分業の発展した商業社会にあっては，スミスが第4章の最後において定義した交換価値，すなわち「特定の対象（object）を所有することによってもたらされるところの，他の財貨に対する購買力」によってサポートされなければ，その有効性を発揮しえないことは明瞭であろう。問題は支配労働量をもって「商品価値」と定義するスミスの方法は，果して上記の意味での交換価値を規定しているのであろうか，ということであり，いわんや「労働が交換価値の real measure であることを立証してえているのか，ということである。

財の（交換）価値を支配労働量によって定義するということは，以下のような単純な判断形式に帰着する。すなわち，財Aがx量の労働を支配＝購買し，財Bがy量の労働を支配するとすれば，二財の交換比率は各財の支配労働量の逆数の比で与えられ，財Aの財Bに対する交換価値を A_B と記せば，$A_B=x/y$ となり，各財の支配労働量に比例して定義される。この推論は一見すると自明の真理であるかのように思えるけれども，実は前提条件の吟味が欠けている。それは各財の支配労働量がそもそもどのようにして測定されるのかということである。これは技術的な問題にすぎないけれども，上記の命題の有効性にとってはその死活を意味するほどのものである。立論の有効性が，一にこのことが論証されるか否かにかかっているのだから。

この測定の可否もその結果次第では立論の基礎そのものを脅やかす類のものであるけれども，この支配労働量による「商品価値」の規定には，もっと根本的な問題が含まれている。というのも，交換価値すなわち財相互の交換比率が問題である以上，よしんばそれが支配労働量によって規定できたとして（さきほどの $A_B=x/y$），一体それがいかなる意味で実質値として定義されているのか，ということである。「実質価値」（㉒），「実質価格」（②，⑦）を提起する場合，それは一面では価値や価格の真実の原因あるいは尺度を示すものとして使用されるのだろうし，スミスが労働を尺度にして測った場合の価格を「実質価格」（⑦）と名づけるのがそれにあたるといえる。同義反復的に聞えるけれども，真実の尺度（real measure）で測定された価格が「真実価格」ということになる。

ところで「実質（真実）価格」というのはそれが真実の尺度によって測定されたそれである以上，それは論理必然的に通常の価格に対する関係（批判・修正）を含んでいることになる。通俗的に言えば，名目価格・貨幣価格に対する補正である。真実価格論がはらむ通常価格に対するこうした関係を，スミスの支配労働量をもってする商品価値規定は，いかなるかたちで内包しているのだろうか。もしも現実の商品がそれで取引・交換される貨幣価格に対し，真実価格論が何ら抵触しえない類のものであるとすれば，いいかえれば真実価格論の世界が財の交換価値の世界とディメンジョンを異にしているとすれば，その

場合にはそれは検証されえない独断にすぎず，それはいかなる意味でも（交換）価値の理論とはいえないことになろう。これはスミスの説が労働価値説であるか主観価値説のどちらであるかという問題以前の事柄であり，それはこれからの検討過程で自ずと明らかになろう。いま提起した問題は密接に関連しているのであるが，さしあたりスミスの問題意識のうえで圧倒的比重をしめている前者からみてゆこう。

（二）

自己の立論にとってこの測定問題が枢要な位置を占めていることをスミスは十分自覚しており，このあと第4パラグラフから第17パラグラフまでは大げさに言えばこの論証に心血を注いでいると言っても過言ではない。ところがである。第4パラグラフの編者キャナンによって附された〝見出し〟が「労働を測るのは困難だから，価値はふつう労働では評価されないし，」となっていることに象徴されるように，実際の議論の進行は正面から測定問題に取り組むのを避け，課題を測定技術の困難性を理由に異なる方向に設定する。この点をスミスは直截に次のように語っている。

「交換価値を評価するには，それが購買しうるあらゆる他の商品によるほうが，それが購買しうる労働の量によるよりも自然である。前者は目に見え，触知しうる物体であるが，後者は抽象的な観念（abstract notion）であって，たとえ十分理解しうる（intelligible）ものにすることはできるにしても，前者ほどまったく自然（natural）ではなく，また自明（obvious）でもない。」(⑤)

さらに，次の第6パラグラフにおいて，「貨幣が商業の共通の用具になると，あらゆる個々の商品は，……　しばしば貨幣と交換される」ので，「あらゆる商品の交換価値は，……貨幣の量によってしばしば評価される」という経験的事実が語られる。ところが，次の第7パラグラフにおいて，対極をなしているはずの両者，つまり一方は「抽象的な観念」であるところの財が「購買しうる労働の量」，他方は「目に見え，触知しうる物体（a plain palpable object）」であるところの商品および貨幣（商品）のうち，どちらが交換価値を評価する尺度標準として適当であるか，というように場面が設営されることにより，論

議は新たな変容を見せはじめる。というのも，本来対極的位置にあるものが，その優劣を比較されることにより，両者は同一のディメンジョンに，この場合はしたがってどちらか一方の次元に還元されることを先の問題設定は意味するからである。実際にスミスが選択したのは後者である。そのうえで，尺度財の度量標準・単位の要件として不可欠な固定性が，誤って尺度財自体の価値の不変性と同一視されることにより，いわゆる「不変の価値尺度」論が展開され，論議は混乱の度を深めていく。

この不変の価値尺度論もスミスにとってはかなりの比重を占めているのであるが，この論議を導入する契機をなしているのが，先のディメンジョンの統一であることを想い出すならば，ここで検討しておく必要があるのは後者の点である。確かに不変の尺度との関連で実は新たなターム，「労働の価値」（value of the labour）が登場してくるのだけれども，このタームの導入の根拠もやはり先のディメンジョンの統一にあるからである。

さて，財の「購買しうる労働の量」をひとまず普通の商品や貨幣と同等の次元に還元し，ついで尺度財の要件を根拠に普通の財貨や貨幣商品にくらべて「労働の価値」が適格であることを議論した後，スミスは改めて自説の結論を次のように述べる。

「それ自体の価値がけっして変動しない労働だけが，いつどのようなところでも，それによっていっさいの商品の価値が評価され，また比較されうる，究極の，しかも実質的な標準（real standard）である。労働はいっさいの商品の実質価格（real price）である……」（⑦）

この第7パラグラフに結論として登場する「実質価格」なるタームで言い表わされていることは，本章の第1パラグラフの結論，すなわち「労働はいっさいの商品の交換価値の実質的尺度なのである」ということと同じである。これだけをみると「商品の価値」はその支配労働量である，と定義された仮説は，不変な「労働の価値」を媒介にして証明されたかにみえる。スミス自身がその点を力説しているだけにそうである。ここでは第8パラグラフ以降に展開される不変の「労働の価値」を媒介した論議が，いかなる実質（real）価格論に帰結するかを予測しておくためにも，最初の仮説にはらまれていた問題点を剔

抉しておこう。

スミスの論理は，商品の価値はそれが支配・購買しうる労働の量に等しいと定義したうえで，「それゆえ（therefore）労働はいっさいの商品の交換価値の実質的尺度である」ということであった。そして，私が先に第一の問題として提出したことは，この立論の全基礎は各財の支配労働量の具体的測定の可否にかかっているということであった。何故なら最初に掲げた事例でいえば，財Aの支配労働量x，財Bのyが測定されなければ x/y は意味をもたず，財相互の交換価値・相対価値が決定されえないのは自明の理だからであり，またもし決定されえないとすると，到底労働が交換価値の real measure でるあことを立証できないはずだからである。ここで仮説の可否をみるために，次のような事例を設定しよう。今度は財A・Bの支配労働量が測定できたと仮定した先の設例は避けて，もっと一般的な事例，すなわち財Aと財Bが交換される場合である。この設例はスミス自身の支配労働論においても，たとえば「かれの財産の大小は，この力の大きさ，つまりその財産がかれに購買または支配させうる他の人々の量か，またはこれと同じことであるが，他の人々の労働生産物の量かのいずれかに正確に比例する。」（③）とか，あるいは「ある特定量の金銀で購買または支配しうる労働の量，つまり（or）それと交換される他の財貨の量」（⑦強調点は引用者，今後ことわりのない限り強調点は引用者のものである）等，見い出されるものである。すなわち，これらの事例においては当然のことながら財相互の交換が問題にされているのであって，それらの過程とは別個に財と労働の交換が取り扱われているのではない[2)]。このことは，測定上の困難がとり上げられた第4パラグラフにおいても，それが財を生産する生産過程との関連で提起されている限りでは，財相互の交換における支配労働量を測

2）それ自身，価値をもちえない労働に「労働の価値」なる表現が適用され，そして「労働の価値」が労働者の報酬として定義されると，支配労働量の労働は生きた労働をさすことになり，財の交換過程を考察対象に据えることで維持されてきた，支配労働量と支配労働生産物の量の代替性が一気に奪われてしまう。たとえば，論議がすでに変容しているパラグラフでは次のような叙述になっている。「シナのカントンでの半オンスの銀は，ロンドンでの一オンスよりも多量の労働と多量の生活必需品や便益品との双方（both）を支配しうるであろう。」

定しようとする試みであることを陰に物語っているし[3]，そうした分析的な考

3) 第4パラグラフの主な記述は次のとおりである。「二つの異なる労働量のあいだの割合を確定することはしばしば困難である。二つの異なる部類の仕事についやされた (spent) 時間だけでは必ずしもつねにこの割合を決定しないであろう。耐えしのばれた辛苦 (hardship)，または働かされた創意 (ingenuity) のさまざまの度合いもまた，同様に計算にいれられなければならない。一時間のつらい作業 (an hard work) のほうが，二時間のやさしい仕事 (easy business) よりも多くの労働をふくんでいるかもしれないし，……。実際のところ，さまざまの部類の労働のさまざまの生産物が交換される場合には，両者に対して多少ともしんしゃくされるのが普通である。とはいえ，それは……市場のかけひきや値切りによって調節されているのである。」(④)

ここでの論議はマルクスの還元問題（複雑労働の単純労働へのそれ）に相当している。なお，このパラグラフの解釈にも関連することだが，主要には第7パラグラフの解釈において，スミスの説を主観価値説とみなす見解が，近代経済学以外でも通説となっている感がある。一例をあげれば，わが国でスミス研究の権威である和田重司教授も次のように記している。「通常の人間の労働投下を，スミスは安楽，自由，幸福の犠牲だとみて，主観的価値尺度だと考えた」と（経済学史学会『年報』第22号，1984年11月。69ページ）。しかしながら，ここでのスミスの論述は，それ自体としては価値をもちえない労働——労働を尺度とする限りそうである——を誤って「労働の価値」なる表現をし，これまた誤解をしてのことだが，その「労働の価値」の不変性をあえて証明せんとするところに「等量の労働は，……労働者にとっては等しい価値である」とする，まさに「主観的価値尺度」を唱えたのである。その限りでは，スミスが「主観的価値尺度」を唱えたことは事実である。問題は，しかしながら，価値をもちえないししたがってまた証明されるはずもない「労働の価値」の不変性を「証明」せんとする過程で登場した「主観的価値尺度」論は，その後，スミス自身が上記のカテゴリーを放擲し，現実性をもった「労働の価値」カテゴリー（賃金）に転進すると同時に，上記の尺度論もその有効性を失うのは当然ではないか，ということである。「労働の価値」が現実性を有するカテゴリーへと変容していった後は，その不変性とは実質賃金率の固定性の意味に変更されているのであるから，スミス自身，最初に使用された意味での「労働の価値」の不変性を信用していなかったのである。スミスがこの意味での不変性をいかに信用していなかったかは，第7パラグラフの混乱した叙述，すなわち「それゆえ (therefore)，それ自体の価値がけっして変動しない労働だけが，……究極の，しかも実質的な標準 (real standard) である」とする結論を導く前の文章が，それとなんら論理必然性を有しないものであることからも推察される。その前の文章とは，生産の難易度にもとづく，いわゆる投下労働説的な規定である。なお，近代経済学の解釈は，主観的価値（原因）論を前提とするところからの読みこみであるが，労働価値（原因）説をとるマルクス経済学は，スミスの価値原因

察が財の「購買しうる労働量」(⑤) をして「抽象的な観念」と叙述せしめたものと解釈すると合点がゆく。この場面設定が変容するのは「それればかりではなく (besides)」の文言で始まる第5パラグラフ以降であり，労働が普通の商品や貨幣と同格扱いされていく過程，労働が「労働の価値」に代替されてゆく過程においてである。

さて，こうしたもっとも一般的な商品交換の事例において，支配労働量はどのようにして測定されるのだろうか，たとえば鉄1トンと小麦5Kgが交換されていると仮定した場合に，たとえば鉄1トンの支配労働量がX時間あるいはY人・日等々であると測定されるためには，同等の資格で小麦5Kgの支配労働量が対鉄交換において測定されていることが必要である。純粋な支配労働論はこうしてみると論理的な悪無限，いわばトートロギッシュな命題であり，問題提起自体が成立しえないのである。したがって，支配労働論のかかえている難点は，実は測定技術上の困難以前のそれであったのである。この困難を解決する道は二つしかない。一つは各財に共通な原因を探ることから共通の尺度を規定しようとする立場であり，他方は問題提起のもつ同義反復性を訂正すべく新たに問題を設営することである。前者は支配労働論とは別様の「実質価格」論，すなわち「あらゆるものの実質価格，つまりあらゆるものがそれを獲得しようと欲する人に現実に費やさせる (costs) ものは，それを獲得するための労苦や煩労である」(②) とする見地，あるいは「貨幣または財貨は，労働の一定量の価値をふくんでおり，われわれはそのとき，それらをこれと等しい労働量の価値をふくむと考えられるものと交換するのである。」(②) とする叙述のうちに垣間見ることができる[4]。いわゆる投下労働価値 (原因) 説とでもいうべきものがこの立場である。もちろん，各財貨の共通的性格を指摘するだけで

説と先に解釈された「主観的」尺度論とをどのように整合させるのであろうか。「実質価格」論の前提条件，フレーム・ワークの吟味を目的とする本稿では，この点には立ち入らない。

4) ここの「労働の価値」をめぐっては，マルクスの誤謬説とこれでよいとする説 (羽鳥卓也教授，時永淑教授) があるが，等者は前者の見解をとっている。全体のコンテクストでみると定義可能なカテゴリーとしてのそれが登場するのは，第8パラグラフ以降というのがその理由である。

は，そこで採用された尺度で測定された価格が現実の各財の価格・市場価格との相関関係を明らかにしない限り，それはまだ「実質（real）価格」として論証され尽してはいない。この古典経済学の共有する問題点は後にふれることにして，この立場が先の支配労働論のもつ難点をくぐり抜けていることは事実である。

マルクスも指摘したように，スミスは平気で自説（支配労働論）を裏切って，自説のトートロギー的性格を抹消するため随所で投下労働説に立ち戻り，それによって叙述の統一性を破壊さえしているのであるが，それでもスミスが歩まんとする基本的大道は後者，すなわち課題を別様に設定することによって支配労働論を強引に支持せんとするものである。この結末を見定めるためには，もう少しスミスの行論についてゆかねばならない。

（三）

第8パラグラフにおいて「労働の価値」なるタームが「労働の価格」と定義されて登場するや否や，財相互の交換と関連して取り扱われていた支配労働論は大きく変容し，第4パラグラフ以後，測定の困難性を皮切りに財の「購買しうる労働量」を普通の商品や貨幣と同列に置いて尺度の優劣を論じた方法の問題点が一気に噴出してくる。そのターニング・ポイントをなすのは「労働の価値」の不変性を強弁した第7パラグラフの次のそれ，キャナンの〝見出し〟によれば「それにもかかわらず（although），雇主は労働の価値は変動するものとみなしている」とする叙述である。もちろん，このパラグラフの主要な主張は，いまだに「労働の価値」の不変性であり，スミス自身第7パラグラフですでに展開ずみの見解，すなわち「等量の労働は，……労働者にとってはつねに等しい価値であ」（⑧）ることを再録しているほどである。とはいえ，雇主の立場という体裁の下に「労働の価格」（⑧）の変動を説いたことが契機をなしてか，本来証明すべき課題であったはずの労働＝「real measure」，あるいは労働＝「実質価格」論は意外な展開をみせる。引き続く第9パラグラフでは以下のように論じられている。

「それゆえ，この通俗的な意味では（in this popular sense），労働は諸商

品と同じように，実質価格と名目価格とをもっている，といってさしつかえなかろう。その実質価格は，それと交換にあたえられる生活必需品や便益品の量であり，その名目価格は貨幣の量である，といってさしつかえなかろう。」(⑨)

一体，スミスはこの文章をどんな気持ちで書いたのだろうか，これまで論理の統一性を損い叙述が支離滅烈な状態に陥るほどの犠牲を払いながら，支配労働論と労働=real measure 論を連結させてきた緊張の糸が，ここにきて一気に切れたように私には思える。雇主を登場させ，さらに論議を「通俗的」レベルに落した後の残りのパラグラフでは，実質と名目の区別は「単なる思索の問題ではなくて，ばあいによってはかなりの実用をともなう問題（considerable use in practice）であ」(⑩) るとして，最後の第37パラグラフに到るまで，貨幣地代と穀物地代の得失および金銀比価の歴史的考察に筆を進めることになる。

さて，話しをもとに戻そう。「通俗的な意味」で，普通の商品にたとえて定義された「労働の実質価格」は，「労働者の生活資料」(⑭) つまり物量タームである。正確さを期すならば一定量の物量（賃金バスケット）としてのみ定義されえたものである。だとすれば，早くも「労働の実質価格」は普通の商品のそれとくい違いを見せることになる。なぜなら，普通の商品は自らの「実質価値」を，購入しうる他の生産物の量と並んで，支配=購買しうる「労働量」としても定義されていたにもかかわらず，「労働の実質価格」の方は物量タームによってしか定義できないからである。しかしながら，これは少し考えてみれば自明の理であろう。そもそも商品の「実質価格」というのは労働を尺度基準にして測定された大きさ，たとえばx時間，あるいはy人という単位をもつものであるから，「労働の価値」を労働で測定するということは不可能なことである。上記のように「実質価格」が定義される限りにおいては，その定義を採用する論者が他方において「労働の価値」を云々することは論理矛盾を犯すことになる。労働を労働で測ることはできない相談であるから，労働だけは「実質価格」をもちえない，とするのが一貫した立場というものであり，これはマルクスが金だけは商品価格の意味では「価格」を持ちえないと説明した場合に相当する。したがって，「通俗的」レベルで議論を展開することは，スミスを

して労働が real measure であることを論証せんとする労苦（toil）から解放させたのではなく，論議の土台を崩壊させてしまったのである。賃金の意味での「労働の価値」に限って，それは物量タームで定義されうる，すなわち一切財相互の「交換価値を規制する原理」あるいは「価値」規定を素通りしうる特典を有しているが，商品の（交換）価値が支配生産物量によって規定しえないことは日の目を見るより明らかである。最初の二者択一的な，あいまいな定義（支配労働量と支配生産物量との等置）が，ここにきてその弱さを露呈しはじめたと見れなくもない。

とにかく，不変の尺度の追求と相まって，これまであいまいに使用されてきた「労働の価値」なるタームが，「通俗的」レベルに議論を据えることで論議の動揺は終止符を打たれ賃金の意味での「労働の価値」が安住の地をうる。ここでもスミスは立証の怪しい命題よりも，術語の経験的・現実的妥当性を選択したのであるが，その代償はいかほどのものであろうか。それ自体「価値」をもちえない（労働量を度量標準とする限り）労働に対して，「労働の価値」なるタームの使用を断念し，その代わりに経験的妥当性を有する「労働の価値」＝賃金にその定義を変更したことは，その時点において，さしあたり労働が財の「実質価格」あるいは労働が各財の交換価値の real measure であることを論証せんとしてきたこれまでの論述を反古にしたことを意味する。というのも，これからこのタームを駆使して新しい「証明」が開始されるのだから。

この後，主に第15パラグラフから第17パラグラフにかけて展開される議論は，もはや財相互の交換価値＝相対価値を「規制する原理」の研究とはいいがたく，各財貨あるいは所得（地代）の実質賃金率あるいは貨幣賃金率を媒介とした（生きた）労働量の支配・購入の考察とでも要約しえよう。とはいえ，スミス自身は17パラグラフの冒頭で力強く次のように総括しているのだから，このパラグラフの考察を省略するわけにはいかない。

「それゆえ，労働は価値の唯一の普遍的な尺度であり，また唯一の正確な尺度でもあるということ，すなわち労働は，いつでも，またどこでも，われわれがそれによってさまざまの商品の価値を比較しうる唯一の標準であるというこ

とは，明白であるように思われる」(⑰)。

新しい論述は「穀物地代は，貨幣地代よりも安定的であるが，」と，「通俗的な」〝見出し〟を附されたパラグラフで展開される。

「等量の労働は，長期間をへだてれば，労働者の生活資料である等量の穀物で購買するほうが，等量の金銀またはおそらく他のどのような商品で購買するよりも，いっそうその近以的（nearly）な量で購買されるであろう。それゆえ，等量の穀物は，長期間をへだてれば同じ実質価格（real value）にいっそう近似的であろうし，いいかえれば，それはその所有者に，他の人々の同一量の労働にいっそう近似的な量を購買または支配させうるであろう。」(⑮)

ここでの議論の特徴は次の二点にあると思われる。一つは，これまで労働が real measure であることを立証するのに不可欠の要件とされてきた「労働の価値」の不変性を放擲し，新たにその任を果すものとして実質賃金を構成する素材である穀物を登用していること，もう一つは，穀物の支配労働量の「近似的」一義性という特異性を用いることで，「労働の価値」ターム（およびその不変性）の虚構性の確認と期を一にして瓦解した，労働＝real measure 論，したがってまた各財の real value，real price 論を再建せんとするものである。

この試みは成功裡に終るであろうか，さしあたり，「労働の価値」タームに替えて穀物を登用したことから帰結される変更は，立論の場面が普通の財相互の交換から穀物と生きた労働という限定された部署に設営し直されたということであろう。このように立論の場面が移動したということを，スミス自身「労働の実質価格」(「労働者の生活資料」) も社会の状態，つまり「富裕にむかって前進している」かそれとも「静止」または「後退」しているかによって変動することにふれた後，次のようなかたちで叙述している。

「穀物で留保された地代は，一定量の穀物が購買しうる労働の量の変動だけから影響をこうむる。ところが，他のあらゆる商品で留保された地代は，ある特定量の穀物で購買しうる労働の量の変動ばかりではなく，ある特定量の商品で購買しうる穀物の量の変動からも影響をこうむるのである。」(⑮)

この叙述は新しい立論の構図を浮びあがらせている点でまことに興味深い。

先の引用文と合わせてスミスが卒直に述べていることを要約すれば，以下のようになろう。いま，労働一単位の「実質価格」，すなわち物量ターム（穀物）での賃金＝実質賃金率をwで表わすとしよう。そして，ある隔った時期（これを t_1，t_2 としよう）の地所の穀物地代をそれぞれ Ct_1，Ct_2 と記せば，Ct_1 および Ct_2 の支配労働量は，それぞれ Ct_1/w，Ct_2/w となる。ところで，スミスのいう「等量の穀物」は「近似的」にしろ「同じ実質価格」をもつということでいわれているのは，たとえば $Ct_1=2Ct_2$ であるとし，$Ct_1/w=\alpha$（単位の労働を支配）とおけば，$\frac{Ct_2}{w}\Big/\frac{Ct_1}{w}=2\frac{Ct_1}{w}\Big/\frac{Ct_1}{w}=2\alpha/\alpha=2$ であるという，きわめて単純な事柄である。いいかえれば，特定の穀物量はその絶対的な大きさ（物量ターム）に比例して労働を支配するから，「等量の穀物」は等しい労働を支配するということなのである。しかるに，普通の商品はこのような特性を持ち合わせていない。よしんば実質賃金率を固定的とみなす仮定をさきと同じく採るとしても，肝心のそれ（財）の穀物との交換比率が規定できないことには支配労働量の大いさを確定することはできないのである。

新しい立論で展開されたことは，いってみればこれだけのことである。「等量の穀物」が等しい大いさの労働を支配する，という穀物の特性は，有体にいえば10トンの穀物は5トンのそれの2倍の労働を支配する，いいかえれば穀物の物量比率に支配労働量の比が比例するという陳腐な結論を招来するだけである。実質賃金率を不変とみなす仮定から導かれるこの貧弱な結論を前にして，スミス自身は今更ながら「労働の価値」の定義変更がもたらした事の重大性に深い吐息をついたに違いない。しかしながら，これしきのことで失意のうちに身を引くようなスミスではない。「労働は価値の唯一の普遍的尺度であり，また唯一の正確な尺度である」という，スミスに運命づけられた絶対的目標に向って最後の挑戦を試みる。そのために残されているパラグラフは今や一つ（第16パラグラフ）だけである。事態を打開する起死回生の方策を満身創痍のスミスは隠し持っているのであろうか。

（四）

こうした思い込みのうえにたって第16パラグラフの扉を開いてみると，そこ

に展開されるフィナーレはなんとも意外な感のするものである。それがこれまでに展開されたことへの修正であれば，我々は動揺しないだけの修練をすでに身につけている。たとえば，このパラグラフの書き出しが「しかしながら（however)」で始まり，続いて「穀物地代の実質価値は，世紀から世紀にかけての変動が貨幣地代のそれよりもはるかにすくないにしても，年々の変動がはるかに大きい」(⑯）と告げられても格別驚きはしない。しかしながら，こととここに到って，貨幣価格（「労働の貨幣価格」および「穀物の平均的または通常的な価格」）の世界を眺望させられようとは誰が予測しえたであろうか。貨幣価格あるいは市場価格の世界はまさに名目（nominal）のそれであり，「実質価値」あるいは「実質価格」の世界とは最も異質な次元にあったのではなかったか。とはいえ，それこそ観念的な見方だと批判されてもしかたあるまい。この論稿の最初の段階で「実質」(real）に関わる論議は，現実の貨幣価格をより深い根拠（社会関係）から説明しえた場合にのみ，その「実質価値」論は初めてそれが「実質」たるにふさわしい資格を付与されうることを提起しておいたが，こうした見地からすれば，論証の仕方はともあれ，フィナーレを貨幣価格の登場で幕を閉じんとするスミスの方法は，やはり恐るべき現実感覚と言うしかない。

しかしである。価値（の原因）をどう定義するかは別にするとしても，価値が定義されていなければ任意の尺度基準で測定することによって財に価値を付与することができないこと，したがってまたその尺度が「商品価値」のそれでもなんでもないということ，これまた必然である。ここで，これまでの展開をふり返っておこう。スミスは支配生産物量と支配労働量を並存して取り扱うことにより，最初のうちは各財相互の交換の次元で「交換価値を規制する原理」を究めんとした。その過程は同時に費用論的アプローチ（投下労働説）からする「実質価格」(いわゆる toil and trouble）の規定も混在するなかで，労働が real measure であることを主張したのであった。しかしながら，測定の困難を表向きの理由として支配労働量が普通の商品や貨幣と比較され，そこから尺度としての優劣を検討する過程で，それ自体価値を持ちえない尺度基準としての労働に「労働の価値」なる表現が付され，さらに不幸なことであるが

今度は度量標準の要件である固定性が証明されるべくもない「労働の価値」の不変性に転嫁して把握され，しかもその誤謬に依拠することで財貨（貨幣商品も含む）に比べて労働が尺度として最適であることを「立証」せんとしたのであった。しかしながら，労働が尺度であるとする自らの結論に矛盾する「労働の価値」ターム，および論理的にも経験的にも検証不可能な「労働の価値」の不変性，という二つの大きな傷をもった仮説は，現実性を取り戻すべく放棄されねばならない。そこで「雇主」の見地からすれば不変な「労働の価値」も変化してみえる，という口実のもとに，うしろめたさを感じながらも「労働の価値」の不変性に別れをつげる。それと同時に，この時点で不変性という重荷をはずされた「労働の価値」は，一気にその現実性という資格を有しており，誰からも非難されることのない発祥の地（「労働の実質価格」＝賃金）へと帰還する。これはいわば第一の変節である。しかしながら，この新天地も労働＝real measure 論にとっては安住の地とはいえない。それどころか，「労働の実質価格」＝実質賃金率を媒介として，同じ素材からなる穀物商品は両者が同じ stoff からなるという特性により，価値について一切規定することなく物量のままで支配労働量を確定できたけれども，普通の財貨は穀物との交換比率も規定されないが故に，（支配）労働量との関係は絶ち切られたまま放置されることになった。かくして事態はスミスの意図とはまったく逆に，労働が real measure であるどころか，何らかの実質尺度論，実質価値・価格論を展開するフレム・ワーク自体が取りはずされ，商品は使用価値あるいは富の世界に舞い戻ってしまったのである。

少し長くなったけれども，貨幣価格が登場したコンテクストというのは，以上のような展開を背景にしてのことである。

さて，貨幣価格・市場価格の世界に場面が設営された上は，大勢はすでに決定済みであり，後は終局に向って必然の手を打ち進めるだけである。まずなされることは，導き出す結論に整合性を持たすべく，種々の貨幣タームに以下のような制約条件をはめることである。すなわち，「労働の貨幣価格」は「生活必需品」の「平均的または通常的な価格」（いわゆる市場価格の中心をなす市場価値のこと——引用者）に「適応して」おり，また「穀物の平均的または通

常的な価格」は「銀の価値」にも規制されている。「ところが，銀の価値は……，半世紀または一世紀をつうじて，ひきつづき同一」であるので，「それゆえ穀物の平均価格もまたこの期間中，ひきつづき同一」であり，「労働の貨幣価格もまたそれにともなうことがありうる（along with it)」(⑮) と。要するにここでいわれたことは，銀の価値を一定と仮定し，ついで労働の貨幣価格と穀物の平均価格との間に一義的な関係を仮定したことである。その結果として，いかなる立論が導出されたかを知るのは容易なことである。穀物の平均貨幣価格を Cg，労働の貨幣価格（＝貨幣賃金率）をW，とすれば，実物世界でみたのと同じ結論が両者の比率（Cg/W）から生じるのは当然である。等量の穀物は等しい大きさの労働を支配する，ということが，今度はさしあたり，分母子双方とも貨幣タームで記されているだけのことである。しかし，相違はそれだけではない。前者の場合には普通の商品と穀物の交換比率＝相対価値が規定されずに放置されているという根本的な欠陥を有していたけれども，貨幣タームの導入はこの難点を払拭してくれているからである。こうして今や貨幣価格をもつあらゆる財貨は Cg/W を媒介せずとも，自己の貨幣価格をWに関係させることにより，支配労働単位量を算定することが可能になる。これが当初に企図されていた結論であるとするならば，極論すればこれまでの論議はその一切が不要な回り道であったということになる。これほど読者を愚弄することがありえようか。その執筆だけでも十年近い歳月を費し，『最も深遠な思想が明晰なことばで表現されている』[5] と評された偉大な思想家の著作に，一体こういうことがありうるのだろうか。これまでの叙述の悪戦苦闘ぶりからみても，スミス自身はフィナーレにおいてそれほどの変節を招来したとは自覚していないはずである。

先にも述べたように緊張の糸が切れたのはフィナーレに先立つ箇所（第8・第9パラグラフ）であり，私が第一の変節と名づけたところにおいてである。論議の現実性を維持するために検証不可能な，自らの立論に矛盾する術語を捨てた時点で緊張の糸が切れていただけに，「実用」的な事柄を論じているこの箇

5）『諸国民の富』（岩波文庫）（五）において解題を書かれた大内兵衛氏が，その中で引用されているギボン教授の評。

所（第16パラグラフ）を，スミス自身はフィナーレに相当するとは思っていなかったにちがいない。しかしながら，論議を貨幣価格の次元に移行させた第16パラグラフは，第一の変節以上に決定的なそれであった。

貨幣価格と貨幣賃金率（労働の価格）を理論的に与件とみなす取り扱いは，いかなる「実質価格」論，あるいは同じことだが real measure 論を提起しうるか，という風に設問してみれば，その方法のもつ意味は明らかとなる。いま，ある財（もしくは所得）X_1，X_2 の貨幣価格を x_1，x_2 とし，$x_1=2x_2$ と仮定すれば，貨幣賃金率の水準如何にかかわらず，財 X_1 は財 X_2 の2倍の労働単位量を支配する。要するに価格比率に支配労働量の比率は比例するわけである。しかしながら，自明ともいえる上記の結論から，経済的に有意味な結論を引き出せるであろうか。2財の貨幣価格比率は恒等的に支配労働量の比に等しいのであって，それはなんらかの意味での実質タームに還元されていない。有体にいって，たとえば1,000円の財貨は500円のそれに対して2倍の労働を雇用する，という貧弱な命題がどうして実質タームの世界を示しえようか。このように，交換価値に関連してみれば，スミスの立論はナンセンスそのものであり，なにごとも語りえないのである。したがって，多くの学史家は課題を別様に設定してスミスを救済しようとする。一般に Cg/W，x_1/W 等で想記されるのは，分母が消費者物価指数（CPI）であり，それをデフレーターとして消費財価格変動の実質値を求めるやり方であり，分母に GNP デフレーターを用いて国民所得変動の実質値を求めるのも同様の操作である。こうした「通俗的」に受け入れられている実質概念（価額を価値と呼ぶのも同様）から類推すれば，スミスがここで問題にしているのは財相互の交換価値（x_1/x_2）ではなく（$x_1/W=\alpha$，$x_2/W=\beta$ とすれば），α，β すなわち支配労働単位量の大きさによる社会の富裕あるいは「社会的厚生」の推移だということになる。確かに相対価値論では，$\frac{x_1}{W}\Big/\frac{x_2}{W}=\frac{x_1}{x_2}$ となりW自体は捨象されて何の働きもしないのだから，そうした解釈が生まれてくるのも頷けなくはない。

私が先に，貨幣価格の次元に論議を移せば進むべき道は決定されたも同然，という趣旨のことを述べたのは，論議が「実質価格」論としては全くナンセンスなそれに堕するか，さもなくば「通俗的」な意味での実質論議，すなわち，

価値や「交換価値を規制する原理」を規定することなく，貨幣価格＝価額をなんらかのデフレーターで修正するという操作に帰着するかの二者択一しか残されていないからであった。第16パラグラフ以降で展開されるスミスの論述を見きわけることによって，結着をつけることにしよう。

まず最初に登場する第18パラグラフは，「実質価格と名目価格」を「区別」することが，「売ったり買ったりすること，つまり人間生活の比較的ありふれた通常の取引きをする場合には」「まったく無用である」(⑱) という宣告である。そして，次のパラグラフでその理由が以下のように述べられる。

「同一のときとところでは，すべての商品の実質価格と名目価格とはたがいに正確に比例するものである。たとえば，諸君がロンドンの市場である商品とひきかえに獲得する多量または少量の貨幣は，そのときとところで，諸君に多量または少量の労働を購買させるであろう。それゆえ，同一のときとところでは，貨幣はすべての商品の実質的交換価値の正確な尺度である」(⑲))。

ここには第二の変節の顚末が無慈悲にも顔をのぞかせている。こうなることは貨幣価格を与件として導入した時から予想されていたことであった。支配労働単位量によって測られた価格を「実質価格」とするならば，その「実質価格」によってのみ，はじめて財は相互に比較されしたがって相対価値が決定されるのでなければ，実質タームが意味をなさないことは明らかであろう。ところが，第16パラグラフ以降でスミスが提示した支配労働論というのは，与件としての貨幣価格から演繹されたものであり ($x_1/W=\alpha$, $x_2/W=\beta$)，むしろ支配労働量の方が原因ではなく結果なのである。支配労働の導入によって貨幣価格は実質値に換元されているのではなく，貨幣賃金率をデフレーターとして別の次元（支配単位労働量）をさし示しているだけである。要するに，ここには貨幣価格と区別される「実質価格」なる世界がはいりこむ余地はなかったのであり，「区別」しようにもそれはできない相談なのである。「等量の穀物」は等しい大きさの労働を支配する，という言明が，スミスに誤解され，あたかも労働が「普遍の価値尺度」であることが結論しえた，と錯覚した[6] のと同様，等しい大きさの価格が等しい大きさの労働を支配する，という言明も，上記とまったく同じ論理で，労働が「普遍の価値尺度」であることが論証されていない，

ことを意味しているのである。要するに，貨幣価格を与件とし，それとセットされたかたちで登場する場合の商品は，自己の支配労働量を確定すること（x/W）はできても，それは財の「交換比率を規制する」力をまったく有していない代物なのである。貨幣価格から誘導されるのであって，貨幣価格での交換をより基礎から説明しうるのでない支配労働量は，いかなる意味でも「実質価格」とは定義しえないだろう。貨幣価格が登場すれば，スミスの立論の土台をなす実質ターム自身が埋没してしまう危険性は十分に予測されたことであった。それは次の点を考えてみれば理解できよう。外在的価値尺度機能をもち，したがって絶対的購買力をもつとはいえ，貨幣も商品であることには変りはなく，したがって，価値の原理あるいは他の財貨を購買する力としての交換価値に関する限りでは，貨幣商品は何の特権をも持ち合わせてはいない。とすれば，「交換価値を規制する原理」の探究においては，貨幣と商品との形態上の相違はなんら意味をもたないわけであり，したがって上記「原理」を追及する際に欠かせないのが実質（real）タームであるとすれば，real value, real measure 論に貨幣を導入することは，その探究を挫折させることに他ならない。現にスミス自身，力つきて「通俗的」な貨幣価格の世界に身を置いたのであるが，そのとたんに実質タームは永遠にスミスの手中から消失していく運命にあったのである。

したがって，さきに掲げた第19パラグラフに登場する「実質価格」論は，魂の抜けたトートロギッシュな命題にすぎない。それは，たとえば100£の価格をもつ財は100£の貨幣（銀）と同一量の労働を支配する，という自明な事実の描写にすぎず，まさになんの実質をも備えてはいない。貨幣価格の世界に安住するならば，まさに貨幣こそ外在的な「尺度」であり，それ以上深く追及することは何もない。課題自体が雲散霧消してしまっているのである。

---

6) この場合にも，実質賃金率をデフレーターとして，C_1/w，C_2/w から支配労働量が導かれたのであり，支配労働単位量が原因として交換比率を規定したのではなく，仮定された物量の大きさ——たとえば，C_1＝小麦10トン，C_2＝小麦20トン——から逆に支配労働量を引き出したのだから，支配労働単位量はなんら交換比率の決定因とはなっていない。したがって，支配労働単位量の度量標準をなす労働（時間）も，決して価値の原因や尺度となっているわけでない。

次のパラグラフは，「通俗的」な主張の帰結を実直に物語っている。

「ロンドンでの一オンスの銀よりもカントンでの半オンスのほうが，より多くの労働や，より多量の生活必需品や便益品に対する支配力をあたえるであろうということは，かれ（商人のこと，引用者）にとってはまったくつまらないことである。ロンドンでの一オンスは，これらのすべてのものについて，ロンドンでの半オンスがそうしうる二倍量の支配力をつねに彼に支えるわけであって，これこそ，まさにかれが欲することなのである」(⑳)。

ここでは商品の「実質価格」なるタームは見事に姿を消している。ここでも貨幣価格の現実性に叙述を統一することで，事実上，解読不能な19パラグラフの展開を訂正したのである。次の21パラグラフでは，「価格が関係するかぎりでの日常生活のほとんど全業務を規制するのが財貨の名目価格または貨幣価格であるから，われわれは，実質価格よりもこのほうが，はるかに多くの注意を払われてきたということをすこしもふしぎとは思わない。」(㉑) と現実に脱帽している。そして，次のパラグラフにおいてこの長い旅に終止符が打たれるのであるが，以下のように締めくくられている。

「それにもかかわらず，本書のような著作では，さまざまなときとところで，特定の商品のさまざまの実質価格を比較すること，すなわち，さまざまの場合に，特定の商品がそれを所有していた人にあたえたであろう他の人々の労働に対する支配力のさまざまの程度を比較することは，ときには有益(of use)であろう。こういうばあい，われわれは，それとひきかえにふつうこの商品が売られた銀のさまざまの量を比較するよりも，むしろ銀のそれらのさまざまの量で購買しえた労働のさまざまの量を比較しなければならない。しかしながら，ときとところをへだてた労働の時価 (current price of labour) を，ある程度正確に知るなどということはほとんど不可能である。穀物の時価ならば……。」(㉒)

ここにははもや真実の尺度を探究せんとした強靱な精神は跡かたもなく，現実性（現象＝仮象）に身を委ねた疲弊したそれの痕跡があるにすぎない。「交換価値を規制する原理」をみきわめんとするものは，かくも精神の消耗を要求されるのであろうか。